

日本大学経済学部経済科学研究所研究会

【第226回】

2024年12月4日

学術講演会

「社会的経済，連帯経済と地域経済」

〈講演者〉

専修大学経済学部教授

長 尾 謙 吉

「社会的経済、連帯経済と地域経済」

専修大学経済学部教授 長尾 謙吉

1. はじめに

皆さん「こんにちば」、あるいは、「こんばんは」でしょうか。長尾謙吉と申します。現在、専修大学の経済学部で教えております。皆さん、ご存じかどうか分かりませんが、歩いて行けるところに専修大学があります。その神田キャンパスは、法学部や商学部、あと国際コミュニケーション学部が中心でして、経済学部は多摩川を渡って生田緑地があるほうに本拠を置いています。私も、実は水曜日の午後、ゼミやっています。ただし、4、5時限ではなくて、3、4時限です。4時限目は早めに終わって出てきました。3年生は法政大学との合同発表会を控えていて、チームごとに残って発表に向けて取り組んでいます。2年生はさっさと帰して、彼、彼女らは喜んでました。自分のとこの学生は帰しといて、ここに皆さん、たくさん来ていただいて、申し訳ないなというふうな思いもあります。夕方にせっかく来たので、ちょっとでも役に立つとか刺激になるようなことを話すことができればなと思っています。

私、もともと経済地理学を専門としております。地域の浮き沈みとか、働くとか、産業がどうなるとか、企業のネットワークがどうなるということを中心に研究してきました。現在も継続していますが、本日の発表タイトル「社会的経済、連帯経済と地域経済」は、9月に日本地域経済学会の研究会を組織した時の全体タイトルです。それを元というふうに宮地忠幸先生から依頼を受けたので、この大きめのタイトルのままとしました。フランスの地域経済をはじめ地域で調査をしています。経済学部だと必ず教わる市場メカニズムに基づく市場経済と、国とか自治体の再分配で動く部分が中心となります。それら二つにきれいに収まるわけじゃないような活動に、フランスでは再び焦点を当てています。かつ、日本だと、そういうちょっとした新しい動き、特に協同組合研究なんかだと、社会的経済が大事だと強調される方が多いです。フランスでは、やっぱりその三つ大まかな柱を立てると、それぞれが大事だという感じで議論が進んでいます。そういう経緯で、本日の

テーマは、フランスから始まって、関心持って取り組んでいることです。

2. 三つの論点

今日は、いろいろオリジナルな研究とかを紹介するというより、研究の中での観点みたいなものを中心に三つ話をしていきます。一つ目はThink locally. ローカルという比較的小さい、特に生活に基づくような範囲、ここをもっと考えなければならないことです。あとで言いますけど、“Think globally, act locally”っていうのは、国際連合ははじめ、いろんなとこのはやり言葉となってきました。地域を大切に考えて動こうとする人も、この言葉を好きな方が多いです。でもアクトだけでは駄目じゃないと。もっとシンクを考えないと駄目だというふうなことです。ローカリティー研究の重要性は、後ろに文献リストがありますが、文献[7]は日本経済学会連合の特集雑誌に書いたもので、文献[7]と文献[6]はダウンロードできるので、また機会あればダウンロードしていただければと思っています。

二つ目は、硬い言葉、社会的経済、連帯経済、あるいはフランスでは、両方合わせて社会連帯経済、あるいは社会的連帯経済と称されるものです。この辺りの概念とか考え方、どういうふうになってきたのかと。日本で考える場合、どういうふうな観点を持って進めるべきかということをしている思索しています。文献[2]は、『社会連帯経済と都市・フランス・リールの挑戦』という本を出版しました。この調査にあたって、2010年代、いろいろ現地に行って、話して、それでフランスで始まって、いろいろ他のことも日本を含め考えるようになったという部分の話です。

最後、三つ目で、あらためて皆さんと一緒に考えたいっていうのは、コミュニティ的なことです。日本だと絆とか、いろいろ人のつながりを生かした部分と、社会という言葉も、いろいろな理解があって、ややこしいのですが、取りあえず全構成員に関わるものというので考えると、そこだと制度、仕組み、ルールとかが出てきます。今、日本、あらためてコミュニティが、大きな災害もあり、あるいは地方創生とか、地域を大事にといっているので、コミュニティへの関心が高まっています。一方、経済学っていうのは、あんまりコミュ

ニティを相手にしない傾向があります。むしろ時には邪魔だというふうな感じであって、いろいろ現実の社会問題や経済問題に、いろんな学者さんとか政策担当者がアプローチをするわけですけど、結論的な部分を読むと、大概どっちかしか強調してないんですね。地域にずっといろいろ取り組んでいる人は、コミュニティ、特に、かつてうまく機能してきたときの良さが頭に残ってるから、コミュニティを大事にしないとダメ、みたいな感じがちです。一方、経済学者はできるだけ透明で、みんなが参加できる、みんなに明快な社会としての制度、というのが大事だと言います。社会科学の中ではコミュニティと社会どちらかしか言わないんです。むしろ現実的な問題に対応するには、それらの組み合わせをどう考えてくかと、全構成員の制度でアプローチというか、そこをしっかりと必要があるよということを、もっとつながり的なものを生かしたのをしっかりとしていく。その辺、どのようにバランスかと、どっちかだけを言うのではなくてということをおもっています。

文献[6]は、去年、人文地理学会のほうで、特別研究発表という長めにしゃべれというふうなことを言われた大会の発表要旨で、まだ論文を書き切っていないんですけど、経済学者は大きな話、好きです。一方で地理学者って細かい話ばかりする人もいます。私が高校生のときに、西川きよしって、やすきよという漫才師のきよしさんが国会議員に立候補したときに、「小さなことからコツコツと」だけど、そういうことを言う人が、大体小さなことからコツコツと、小さなことで終わってしまうという傾向もあります。地理学系っていうのは、私も経済学部において、いろいろな分野出身の人と話します。地理学ではこれでいけるだろうという話ばかりすると、他の学問分野から、大して重要には思われないというのは、その辺に理由があるんじゃないか。だから結論、コミュニティばかり言わずに、そのバランスという、社会とコミュニティっていうのをもっと言えば、他の社会科学の人とももっといい対話ができるんじゃないかっていうのを、この発表のときに話しました。それら三つを話していきたいとおもっています。

きょうの構成は、それに合わせて三つあるのですが、せっかくだからフランスのことをちょっと

紹介しながら進めます。最近の学生さんは、あんまり外国に関心を持たないっていうんですけど、日本大学の学生さんはどうなんですか。専修大学経済学部は国際経済学科があります。国際経済学科は最近の学生さんは国際事情に昔ほど関心が高くないという悩みがあります。あと、国際コミュニケーションという学部ができたので、そっちに人気があるので、経済学部の中の国際経済学科はいろいろ厳しい面に直面しております。私は生活環境経済学科という、どちらかというと生活とかローカルを軸に考えるところにあります。日本のことを話してもいいけど、できるだけフランスとかカナダとかアメリカとか、あるいは発展途上国地域の話も入れながら授業をしています。今日は外国の話も入れたいと思っています。

3. グローバルとローカル

グローバルとローカルの話からです。学生さんに問うんです。経済地理の授業では、グローバルとローカルのイメージ、書けて言っても、なかなか書けないかもしれない。会場には学生さんもいるから、ちょっと聞いてみましょう。グローバル化と国際化の違いを説明しろと言われたら、どう答えますか。なんかアイデアある人いますか。

今日は、いろいろなことをやっていると時間がなくなります。グローバルっていうのは、グローブ、地球の丸いからきています。私が学生の頃は、あんまりグローバルという言葉は出てなかったです。1980年代半ばですけど、それ以降、グローバルはよく使われるようになりました。いろいろな意味で、地球規模での連動性が高まっているんですね。国際という表現は、そういうグローバルなことも言うこともあれば、日本と韓国とか、日中韓とか、米中関係とか、あるいは東南アジアのASEANとかですね、2国間から数国間とか、いろいろなので使えるのが国際です。私が学生のときは、国際がちょうどはやりだったんです。グローバルっていうことで地球規模になってくると、ローカルは考える必要はないのじゃないかと。そうした中で、スローガンで、さっき言った“Think global, act local”っていうので、やっぱりローカルも大事だということけど、だからといってローカル、行動ばかりで考えなくていいのかというふうなことを、ずっと私、おもっています。

このフレーズはやはりで、いろんなとこで見かけます。数年前はコロナでかなり苦労しました。われわれも、なかなか会議とかできなくて、久しぶりに長野県の松本市で会議がありました。専修大学の話ばかりして申し訳ないですけど、専修大学って、比較的長野県は強くて、松本駅を降りると、専修大学の宣伝が横に付いたバスが走っていて、私は感動しました。その専修大学のバスを見る前に、特急に乗っていると、山梨県に都留文科大学ってありますね。教育関係に強い大学で、地域のことも考えてきた大学です。この大学さんもスライドの左にあるようにこのフレーズを使っています。スライドの右側は、オーストラリアの動物園に行つて撮った写真です。オーストラリアの人、いろいろ環境を論じること好きな人、多いわけですね。ここでもフレーズが使われています。“Think global, act local”という、英語としてはlyあってもなくても、意味的には両方おかしくないです。

このフレーズでいいのかどうかということですね。ローカルを考えないでいいし、単純な二分法的枠組みでいいのかどうか。特に地域経済学なんかだと、一時期は、外から来た人間が来る開発はけしからんと、確かに外来型開発にはいろいろ問題があるわけです。私も秋に、例えば岡山県の水島というコンビナートで工場や環境運動の現場を見学してきました。外が悪者で、中はいかにもいい人ばかりだつていうけど、決してそんな単純なことはないわけです。地域について、外が悪いのばかりで、内がいいばかりとは限らないと、今の学生さんは水戸黄門とか知らないけども、知らないんですよ、知ってる？ 水戸黄門だと、大概よくあるパターンとしては、地方に行くと、地方の城代家老とか、城を守ってる偉い武士がなんか悪さをして、越後屋とかの商人かなんかと一緒に、外から来た水戸黄門が悪者を仕留めるパターンあります。あれは外からメスを入れるってパターンです。内側は、いい人ばかりのわけでもないし、階層がないわけでもないし。内だから全てがいいっていうのはおかしいんじゃないかと。内と外の二分法に陥るかもしれない危険もある。

それから環境問題とかは、地球規模での環境問題ってありますけど、これもしょっちゅう“Think

globally, act locally”が使われます。特に経済学出身の環境系の方々は、ついドイツやデンマークに学べという話を書いていることが多いです。でもこれは、世界の気候に詳しい人を見ると、ヨーロッパの北側って、世界の中でもまれなぐらい、同じ方向から風が吹くことが多いというふうな地域なのです。そういう地域だと、例えば風力発電なんかも使いやすい面あります。一方で日本列島とかは、対極的にアジアモンスーンって表現されるところです。皆さんも日々の生活で気づいてるでしょうが、日本っていろんな方向から風が吹いてくるし、強いのもあれば弱いものもあるし、もういろいろなわけですよ。

単に外国から学んでいいのかということですが、これは新聞社の写真、持ってきたんですけど、私の両親のふるさととは、淡路島です。風力発電、いろいろな装置ができてんですけど、工夫せずにドイツやデンマークのものを持ってくると、こういうふうに装置が倒れてしまったりとかします。それから日本の場合、住む密度との関係で、住んでいる人との距離をどうするかとか、いろいろ考えなきゃならないっていう意味で、ローカルをしっかり考えなきゃならない。

日本のいろんな分野の人々、それからビジネス現場の人々、ベスト・プラクティスという言葉好きなんです。どこかで成功したいいいことだと。それ、学ばなきゃみたいな。大学でも時々、アメリカのこういう教育が成功しているから、英語で授業したほうがって言う人もいるんですけど、どうなんでしょうね、こちらで英語を授業してみると、分かんないけど、あるいはいろいろな方法あるけど、日本国内でも、どこかの大学でこれ、成功したみたいなのあるけど、やっぱりそのローカルな地域のこととか、その組織のことをよく考えた上で、何がベストかを考えなきゃならないってことです。

立地論の分野では、ドイツのフォン・チューネンさんの農業立地論っていうのがあります。この理論の着想はベスト・プラクティスの輸入についての問題点を非常に突いています。というのも、チューネンっていう人は、経済学者、農業に関する経済学をやるとともに、自分で土地を持って、いろいろやりながら実践してきた、そうすると、イギリスから始まった新しい農法、どうも収穫率

がいいみたいだってなると、まさにその新しい方法を入れてくるのがベストじゃないかっていうのが、もう何百年か前のドイツでもあった。でもそれは違うんだ。チューネンの場合は、売れる市場との距離とかによって、何がベストかわ変わってくるよと。当時は輸送がもっと大変でした。それで、花を植えるのがいいのか、それとも、当時は重くて大変だった燃料にもなる木、林業中心でやるのか。もっと粗放的な家畜をとく、そういうものでベスト・プラクティスは変わるってことだと。今、比較的自分の所や近隣で手に入れられやすいエネルギー源っていうのは、まさに各地域によって違うわけですね。世界いろいろなものを輸入してくるにも、何がいいのかとか、それからもともとエネルギーの消費の仕方もいろいろ違うと。もっとグローバルにも考えなきゃならないけど、ローカルにも考えなきゃならないんだと。シンクローカルを忘れたら駄目なんじゃないか。

それから、この一番下の点は、人文地理学を学ぶ人は、空間スケールがいろいろ、ちっちゃいのから大きいのあるよとか、それからスケールを超えた、より大きなスケールとの関連で小さなスケールを見るっていうところに、他の分野の人より強みがあります。ちょっとその辺、もうちょっと意識したらと思っています。それから私はちょっと特殊な所で学んできたので違いますけど、大きな地理学教室で学んできた人だと自然地理も学んできてるから、おそらく知的近接性があるから、ドイツと日本を全く同じような話でやるような人は少なめだろうというふうなことです。そういう知識を活かして、シンクローカルを活かすというような話をしています。

ちなみにここにおられる学生さんは、2年生、3年生、未成年の方はいない。じゃあお酒の話しても大丈夫なわけですか。昔のテキストに書いてきたのは、自分の実践としては、“Act globally, drink locally”を頑張ろうというふうなことで、もしかしたら宮地ゼミの人は、そんなこと言われなくても、もう十分鍛えられていますというのでしょうか。まあeatも含めてあるかもしれない。ただ、このフレーズは重要で、これ、実は今、カナダのトロント大学って世界的にも有名な大学の学長を、経済地理学者のメリック・ガートラーという人が務めていて、そのメリックに、昔、こんなフ

レーズもあるんだと教えてもらったものです。

さらにこのフレーズは、カナダの地ビールっていうか、最近ではローカルビアと言わずにクラフトビアって言うことが多いかな、の一つのアップーカナダっていうブランドが使っていたものです。二十数年前、私もそのアップーカナダのビールを好きでよく飲んでいました。メリックに聞くと、これはトロント大学で地理学を学んだ後、さらにビジネスを学んだ人が発想した。その人が採用したフレーズなんだということで、経済地理にとってはこのフレーズは重要だし、アクトグローバリーもあるから、ローカルは大事だけど、アクトローカルだけでも駄目だっていうか。さっきの水戸黄門の話しましたが、ローカルだけでずっといると、社会を変えられないことも多々あります。

私もこの間、松山市に大阪ベースのビジネスマンの人たちと一緒にいきました。例えば商店街とか、なかなか若い人が意見、言えないとかですね。古くからのシニアの同級生たちが全部強くてみたいな地域とかもあったりするわけです。なかなか変えられないようなところを変えようと思うと、時には他の地域だったり、国だったり、外国だったりとかの人とか、知恵を入れてくることによって、変えるきっかけを見出す。大学もそうなんですよね。学部や大学全体なかなか変わらないって言って、中でこんないいんだと言っても、なかなか変わらないこともあります。外の力や知恵をちょっと入れながら、そういう意味からすると、アクトもアクトローカルだけでは必ずしも十分じゃなくて、国レベルでも動くし、グローバルにも動くと、両方が必要なんだ、ということ言っておきたい。

そうした中で、ローカル、なんでわざわざローカルを研究するのか。それは、最近の若い人はそうでもなくなったけど、さっき見せたこの本とかは、もう20年ぐらい前だから、一橋大学や大阪市立大学でも、ローカルってどんなイメージを持つかと聞いたら、田舎、地方とか（文献[10]）。きょうはスライド、持ってきてないですけど、私、自分の大学の授業だと、ローカル線っていう、地方の鉄道が映ったスライドを持っていくんですけど、日本は日本国有鉄道の時代に、東海道本線とか山陽本線とかじゃなくて、地方の1日数便、私

が学生に聞くときは、高校時代に電車を1本逃すと遅刻だったっていう人、いないですか？ いますよね、そういう路線をローカル線と呼んでたんです。

だから今の学生以上に、年上の層はもっとそうなんですけど、ローカルっていうと、なんや田舎の話かいというふうに行く日本人が多いんです。英語のローカルはそういう意味で使うときもあるけど、必ずしもそうではなくて、ローカルは比較的狭めの地域というか、とりわけ生活ベースの地域のことです。日本だと田舎イメージもあって余計に、そんなローカルなことやってどうすんだって言うけど、やっぱりローカルだから重要になってくることがある。

地域の違いとか国の違いっていうと、一つ目の点に書いてあるのは、時間的連続ってあるけど、要は経済学部で学ぶので言うと、例えばロストウの経済段階で、どんどん進んでいく、いずれ成熟していくとかあります。経済学ははじめ、いろんな学問は時間を好きなんです。実際、国や地域レベルでいろいろ経済活動が違ってても、先に進んでいること、後から進んでいること、時間で説明してしまうんです。でも、もうちょっと国や地域の多様性を見ると、そんな時間だけでは説明できない多様性がある。もうちょっとそれを大事にしようということです。それからもう一つは、下の部分にいますが、そういう生活もいろいろ見えるようなローカルだからこそ、見える経済や社会っていうのがある。教員にしても学生にしても、どこかに地域調査に行くと、いろいろ話を聞くと、飲み食いすると、温泉に入りながら、なんかそこにいた人と話すと、現地でいろいろすると、そこで出てくる経済っていうのがあるんじゃないかと。

これはまた後で言いますが、「多様な経済」とか社会連帯経済っていうのは、まさにそういう部分です。ちょっとだけ先出ししておくと、この多様な経済っていう議論はですね、この氷山モデルっていうのを使うんですけど、一般的に経済学の教科書で学んでいると、賃労働とか、市場向けの生産、普通の営利企業とかで、それらを集計した話とかが中心になってきます。実際はいろいろそうした、必ずしも市場にも出ないとか、必ずしも政府が関わってないとか、いろいろな部分が

隠れているんじゃないかと。そういうのも考慮に入れていこうっていうのが多様な経済論です。また後で話しますが、そういう話とか、社会連帯経済ということで、市場や再分配だけではない部分というのは、ローカルだから余計に見えるのがあるんじゃないかということと、それからもう一つは、経済地理にしても、いろんな地域経済分析にしても、それでデータを扱うと、私もそうです、いろんな地図に表しますよね。社会の変化を見ると、そういう地理的な違いが、次にどのように社会が動いていくかのときに、何らかインパクトを与えていくわけです。そういうことが多々ある。

私がよく使う例は、銀座とか有楽町の話です。経済史の教材とかビデオとかだと、新しい中間層が出てきて、そういう状況のもとで、劇場文化とか、レストランで食べるとか、新しい消費のもできて、地域にインパクトが出てきたっていうけど、いや、それだけじゃなくて、そういうサービス産業が生まれてくるっていうのは、まさに地理的状況がある。劇場集中地区と、その周りの飲食街とか。そのような地理的状況が、より、またそのサービスを変えていくということで、そういう地理からの逆照射もあるということ、地理や都市化の、もちろん社会の変化の中で、結果としていろいろ現れてくることもあるんだけど、逆に、時には地理が要因となるようなこともあるってことで、そういうとこまで考えてやらないと駄目だと。多様な経済、捉えるときにも、そういう部分があるので、後でまた話したいと思います。

文献〔7〕は、日本経済学会連合で、持続可能な経済社会を論じたものです。各学会からなんか出てきて書けというのがあって、他の分野、それも日本経済学会連合っていうのは、経済学、経営学、商学、いろいろな分野がいるから、他の分野の人に分かるような形で、形式ばり過ぎずっていうのがあって、ちょうどその原稿を書いているときに朝ドラを見ていたら、今の学生さん、朝ドラ、あんまり見ないんですよ、8時から。執筆時は岡山とかを舞台にした『カムカムエヴリバディ』っていうのをやっていて、劇中劇でのせりふで、『暗闇でしか見えぬものがある。暗闇でしか聞こえぬ歌がある』って、侍さんが言うフレーズがあったんです。まさにローカリティー研究が

そうだと、経済学って、多くの授業では、世界、グローバル、あるいは日本とかアメリカとか、国別の話とか、大陸別の話、多いですね。そこではあんまり出てこない、見えないようなのが、ローカルだとまさに見えてくるんじゃないかと、それをもっと考えようという観点です。

4. 「多様な経済」の捉え方

二つの観点を紹介していきます。一つは、アメリカ合衆国やオーストラリアの女性の研究者が共同で言い始めた、ダイバースエコノミーズ (diverse economies) 多様な経済論っていうので、その2人は、もともとどっちかっていうとマルクス経済学的な、かつジェンダー分析を取り組んでみたことを研究されてきました。経済を論じる場合に、この氷山モデルっていいですけど、賃労働であるとか、市場向け、それも資本主義的営利企業の、ここの話を語ることが多くあると、実は、でも生活を見ると、もっと下にいっぱいあるのではないかということで、近所でのお裾分けとか、あるいは昔だと寺や神社とか、友人同士とか、ギフトの習慣、ボランティアで何かをしているとか。一方、アンダーグラウンド的に動くとか、それから企業活動も、必ずしも純粋な営利企業だけではなくて、協同組合をはじめ、いろんなタイプがあるんじゃないかと、そういうところも含めてで、生活が成り立つということです。残念ながら多くの経済学のアプローチは、上の部分だけで終わってしまいます。特に国のスケールの話では、大概「氷山の上部」で終わってしまう。私自身も大概、普通、雇用変化とか何とかっていうと、そういうとこで終わってしまいます。でも下も見ようというふうな観点です。

そうした中で強い理論、「強い」という言い方が良いのかどうか分からないですけど、強固な理論だと、これに基づいた分析だというふうな枠組みで考える。日本だと地方の経済とか、あるいは貧困の人々がたくさんいるところだと、なんか絶望感ばかりになってくるかもしれない。でも、このダイバースエコノミーズの水面の下に、多様な経済をベースに、いろいろな自分たちで考えることをやったら、もうちょっと社会、変わっていくんじゃないかと、そういうふうな考え方であります。絵に描くとこんな感じ (図1) ですけど、

ただ私は、この面積のバランスで描いてるけど、実際は、今、いろんな社会問題がおきてるのは、市場経済の部分がもっと大きくなってからです。上の部分、市場ベースのもの。だからこの絵のバランス、このままだけで考えるのがいいのかな、ちょっと怪しいと思っています。

実践的には、例えばこの本、『Take Back the Economy』っていうので、「経済を取り戻す」っていうのを、自分たちもっとやれることあるんだってことを主張しています (文献 [11])。何が良いことなのかとか、An Ethical Guideっていうのは、この倫理的な面も含めてということで、ローカルなつながりと実践、ただしローカルに全てを投じるわけじゃなくて、ローカルを越えたつながりを持ちながら考えるってことです。

表1はファッションを例にしています。日本での多くの紹介は介護とか育児とかですけど、介護とか育児だと、確かにお金、払ってサービスを受ける。あるいは政府がある程度絡んで、介護保険だとか、育児の手助けっていうのもあるし、もちろん自分自身でやるっていうのもあるし、家族とか近所の人に手伝ってもらうというものもいろいろあって話で伝わりやすいでしょう。

学生さん向けには、医療とか介護とか育児とかにしか、こういうのは使えないのかなと思われてしまうので、ファッションにもいろいろあるよと。ファッションだと、実際コストリカのような所だと安い服、日本だとバン格拉デシュでしょうか、よく使うのは、一方でマネージャーさんもあるよと。自営でファッションデザイナー的な活動もある。もうかる部分、もうからない部分もあるし、家族ベースでなんかやって、ちょっと違うタイプでやってるものもある。必ずしも市場を通さない、無給で自分で服を用意するとか、服を直すとかもある。

ちなみに私の母親の家の系統は、昔、田舎の糸店をやっていました。私の子どもの頃は、まだそこそこお客さんが来てました。ちょっと服を直すとか、自分で作るとかっていう人が多かった。田舎だと、それは田舎のそこそこの町だったんですけど、もっと田舎のほうに行くと、糸店とかもないので、そうすると昔はよろず屋っていうのがあった。コンビニじゃないですけど、バス停の付近とか、ちょっとだけ人集まる所と。よろず屋さんだ

と、よろずなんだけど、糸とかも置いていました。田舎の町で糸の商店をやるとともに、そういうよろず屋さんには卸売的な機能もするみたいな感じでした。日本でも昔は、必ずしもファッションっていうのは、表の市場を通しての部分に出るものばかりじゃなかったです。今でもいらなくなった服っていうのは譲るとかあります。

ファッション業界は、SDGsで一番、よくいじめられるっていうか、無駄がいろんな点多いっていうのがいわれるので、人の意識とか、あるいはメーカーさんの意識も変わって、捨てるぐらいだったら、どこかに寄付して回そうみたいな。いろいろ増えてきているようです。

氷山の上のところで考えがちだけど、もうちょっと違う部分もあるし、そこを生かせば、なんか厳しいとか、つらいとか、そんな部分だけではないって、自分たちで変えられる要素、もっといろんなところで見つかるんじゃないと。そういうのがダイバースエコノミーズの理論であります。水面下っていうのは、その意味で面白いし、地方だと、明治大学の中澤高志先生という経済地理の先生とかだと、まさに仕事とかの分析に取り組んでられていて、つい雇用されてる形態ばかり見てしまうけど、やっぱり自営とか、自営と両方やってるとか、それ以外に地元活動いろいろやってるとかある（文献 [8]）。松山市でも、あるまちづくりの、日本では結構有名な人の話を聞きました。まちづくりの会社、こんだけいろいろやってるけど、自分はこの会社の社長としては一銭ももらってないというふうなことを言われた。もちろん本業のほうもね、いろいろあるし、もともと商店街のそこそこの所だから、その経営とかあるけど、まさに市場には出ない部分とかいろいろあって、そういうところも、より地方都市の中で見えてくるだろうというのがある。

ただ、そうしたことが期待となるのだけど、希望というのでも言えるけども、ただ不安や恐れもあるので、最後に話をするコミュニティの話にも使えるけど、そういう人間関係の中でやってると、やっぱり旧来的な家父長制が強いとか、ジェンダー不平等がより現れかねないというのものもあるかもしれない。論者によっては、やっぱりつながりが強いほうがいいんだけど、強過ぎるつながりは、やっぱりいろんな負荷になることもあるとい

うふうなことと、それから日本の枠組みで考えると、このEthical Guideで、倫理的に何が良いものかということを議論しようっていうのは、なかなか日本の人って、喧々諤々と言いたいようなところもあるので、オーストラリアとかとはまた違う面もある。この上だけで判断しないようにしようという話です。そういうのはローカルだとより見えてくる。

5. 社会連帯経済とその意義

もう一つ、社会連帯経済ですけど、これは、古くは社会、古くでもないですけど、社会的経済っていうのは、いろんな意味合いで使われてます。また一方、連帯経済とあります。ある時期からの社会的経済っていうのは、もうけばかり、プロフィットを第一と置かないようなもので、もうちょっと社会全体に関わるような、日本で社会的企業とか協同組合とか、あるいは民間でも純粋な公的でもないような、第三セクター的な活動も含むような感じで、社会的経済っていうのはいわれて、ヨーロッパでもそうです。

連帯経済っていうのは、これは南ヨーロッパや南アメリカでは多いんですけど、いろんな意味で苦しい人たち、もっと連帯というか、つながって、自分たちの経済を立て直そうじゃないかと。それからもっと自分たち、そうした仲間にとって何がいいのかを考えつつやって、いろんな組織、個人でやっていこうみたいな話が連帯経済としてあったわけです。それぞれ別な系統だったんです。ただ連帯経済というものは、結構ラテンアメリカ的なところで広まっています。カトリック（カソリック）文化とも関わるだろうというふうなことはいわれてます。だから大家族制とか、コミュニティが強いとかと、比較的親和性、高くてきて。ただ、両方、厳密には区別できないようなところもあると。

フランスなんかはまさにそういうふうなところで、時には社会的って言って、時には連帯とかって言って、やっぱり両方の部分を併せ持ったみたいなのが大事じゃないかっていわれるような組織も多いと。だから両方合わせて表現すればいいかと。社会的連帯、社会連帯経済っていうのがあるし、もう一つは、フランスは他の国に先駆けて、そういう部分をちゃんとしたセクターで評価しよ

うということで、実際、法律に基づいて、そのセクターを定義し始めた。

それからフランスは、統計局が非常に強いし、そこは統計、集めるとか分析するだけでなく、研究者の人も多いです。日本の経済学者でもそこに研究に行く人、そこそこいるんですけど、統計的にこのセクターをちょっと把握し始めようということ、2014年ぐらいから本格的にやってくる。社会連帯経済っていうのは何を言おうしてるかっていうと、市場ですね、さっきの普通のマーケット。資本主義的企業。それから国、自治体。それから必ずしも再分配、国、自治体だけでなく、昔だと、地域の志を持った人がとか、名家がそういうのを担うというようなこととかもあったし、協同組合的な中で出てくるのも一部にはありますけど、再分配だけでなく、もうちょっと互酬性の部分ですね、お互いさま的な部分。この部分ですね。カール・ポランニーという人は、以前からそういうふうなことを言われてました。カール・ポランニー的な思考をあらためて考える。フランスの場合は、先ほども言いましたが、市場だけを強調するんじゃなくて、この三つのバランスの中で、経済、どうやっていけるかというふうな話をしています。

そうした成り立ち自体は、別に社会連帯経済の枠だけではなくて、市場、再分配、互酬性という構成をいわれてるわけですね。やっぱりあらためて、互酬性の部分というのを考えていこうというふうなことですが、古沢広祐先生はじめ、こういう議論に注目する方は、協同組合研究とかをずっと熱心にやられた方が多くて、そうすると協同組合的な機能っていうか、私も数カ月前に、生活協同組合の研究所のところでちょっと話しする機会ありました。協同組合研究をベースとする先生は、何でもそっちに結び付け過ぎるようなところがあります。協同組合も大事なんだけど、もうちょっといろいろな活動が、社会連帯経済の中では出てくるんだっていうのは、日本の中でもうちょっと意識しないと駄目かなというふうに思っています。

フランス語では、これ、ESSウーエスエスといって、社会的なことと連帯的なことの経済のことです。英語だとSSEですね、ソーシャル・アンド・ソリダリティー・エコノミーってことで、社会連帯経済と訳したのは、経済の社会的なところと、

連帯的なところっていうのがパラレルで並んでるので、社会的連帯と付けると、ちょっとなんか、どうなんだろうということを意識して、われわれの本では社会連帯経済と使ったんです。他ではあんまり見ることがなくて、日本では、多く社会的連帯経済、そちらのほうが圧倒的に数が多いので、そちらのほうが一般的になるかもしれません。

ここでは市場経済のみだけではなくて、もう一つのということを考えるのと、連帯経済研究の流れは、こういう社会的な有用性と、万人にアクセス可能っていうことが重要になります。それからもう一つ、やっぱり経済活動が純粹にそれだけで表れる部分だけでなく、何がいいのか。フランスでは、ビヤン・コマンっていうのですが、共通善とか共通財とか、両方の意味があるんです。それで経済活動、社会活動のときに何がいいのだろう。このビヤン・コマンという言葉は、社会連帯経済の担い手、当然よく使いますが、それだけでなく、いろいろな政策担当者も使うし、経済学者も使っています。ジャンティロールというノーベル経済学賞を取った人も、まさに共通善というのは大事。そのために経済学はあるんだと述べています（文献 [3]）。フランスではいろんな分野で、やっぱりあらためて今、共通善、共通財というのを考えなきゃならないということが広がっています。

ここでは経済的次元と政治的次元を合わせる。また後で言いますが、経済のサービス化と、需要と供給のつなげ方っていうのを問題にするので、結構小さな地理的スケール、まさにローカルな地理的スケールを考えなきゃならないという意識になっています。それで、日本でいうNPO的なのもたくさん含まれてるわけです。ただ議論としては、non profitを強調するんじゃなくて、むしろnot for profit。利益の出る活動は、別に構わないと。ただ利益が出た場合に、さらにその組織の、例えば株で株主に分配するんじゃなくて、その組織がさらなる活動をしていくために何に使えるのかと。あるいは、その組織自体がちょっと斜めになってきて、何かと統合したほうがいいとか、完全に店じまいしたほうがいいとかあるときに、個人とかに戻すのではなくて、同じような系統、社会連帯経済系の同じようなところに、その資産をちゃんと引き継ぐとか、いうふうなことが法律

になっているというのと、議論というために、株式会社だと株、持っている株式数によって、発言権、変わるわけですけど、原則は、そういう出資額とかではなくて、一人一単位ということはなっています。

それから需要と供給の結合構築という言葉が使われることがあります。需要と供給どちらかがアプリオリ、先になんか明確に出てくるというよりは、いろいろ需要側、供給側、擦り合わせの中で、こうした商品とかサービスが必要なんだということが決まってくるものも多いんじゃないかと。例えばさっきから出てきた育児とか介護とか、人のサービスとかそうです。私も今年になって、肩の下の調子が悪くなったと思って見てもらおうと、いや、肩じゃなくて首が悪いんだと。首の位置が、さすがに齢のせいであってずれてきているというので、そこを意識して治さないと駄目だというふうなことを言われたんです。肩をもまれたりとか、首なんか触られてる現場なんか見てると、やっぱりどういうふうにやってほしいとか、それぞれ違いますよね、だいぶね。そういうものがいろいろなとこにあって、最初から、これで、こういう商品でとか、サービスでとかじゃなくて、互いに言い合う中で、なんか生まれてくるようなもの、そういうのがますます重要になってくるんじゃないかと。後でも言う、今の時代、ケアを中心に、近隣のサービスですね。ローカルな地域でのサービスだと、ますます重要となる。

ただ、私は市場経済の部分でもそのような過程は重要だと思っています。大阪での経験から、ちょっと書きたい論文があるんですけど、わあわあうるさい人たちのボイスっていうのは、やっぱり重要なわけですよね。大阪、よくおっちゃんやおばちゃんがうるさいとかいうじゃないですか。昔、ちょっとスキャンダルにもなったけど、コーナンっていうとこの創業者の人が、関東に出てくると、日本経済新聞のインタビューでも言っていましたけど、関東のほうが市場、大きいから、確かに本格的に出てきて売ると、よく売れると。でも関東の店は、店づくりにはあんまり役立たない。皆さん、どうか分かんないですけど、関東の人たちは、なんか見つけたいもの、もう一つ見つからなかったり、本当はここに置きたいほしいのに、そこになんかいても、黙って自分で探

しに行き、見つけてくるか、帰っていくと。ところが大阪のおっさん、おばさんと、なんでこれとこれを近くに置かへんのやとか、下に置いたら取りにくいやろうとか、いろんな声がわーっと出てくるわけですよね。それが店づくりのいろんなヒントになっていくということですけど、そういう声をいかに活かすとか。

あるいは声が出なくても困った状況というのは、大都市っていうのは、いろいろ集積の不経済っていう困ったことがあります。例えば去年、大学の社会科学研究所のグループメンバーで、オムロンさん、ちょっとついでに訪問させていただいて、皆さん、いろんなものピーって電車、通りますよね、電子の。あれなんかも、非常に改札が大変だからという、まさに集積の不経済どうするかっていうとこで、オムロンとか阪急電鉄とか、いろいろやってきています。今の関西の人たち、何でも関西、元気ないのは、外にいいもの売れる稼ぎ手を育成できないから、外を何とかせい、何とか。でっかい中国とかアジアとか何とかせなあってあるけど、いや、それも大事なんだけど、ちゃんと足元を見ると、大阪だけじゃなくて、東京もです。

経済分析すると、実は東京、大阪、シカゴ、ロンドンとか、グローバルといわれる時代のほうが、ローカル経済のパーセンテージが多いわけですが、っていうのは、ますますサービス経済化が進んでいるし、企業活動にしても、ローカルな所にいるユーザーかなり多いわけですが、売れる。そうすると、ローカル循環が高いから、今の成熟した先進国になってしまった大都市っていうのは、ローカル市場にも重要なとこ多々ある。だからそういう困った中で、やり方のとこにいろいろな市場経済でも打って出る。まさに最初から、こういう供給がいいとか需要があるとかだけじゃなくて、この社会連帯経済だけじゃなくて、供給と需要の結合構築っていうのは、よりマーケットエコノミーの色彩が強いとこでも重要じゃないかと私は思っています。

先ほど言いましたビヤン・コマンっていうことで、フランスではこういう共通財、共通善っていうことで、みんなにとってということが非常に意識されてると。ローカルに根付いた活動が多いんですけど、それは閉じたわけじゃなくて、いろん

なネットワークがあるってことです。これからフランスの話とか紹介していきたいと思います。時間も厳しいので、とびとびですけど。

私たちのチームは、もともと社会連帯経済に関心あったというよりも、フランスのリールっていうのはベルギーに近い北東部なんですけど、エネルギーと繊維関係が中心で、まさに先進国の斜陽化する地域で、斜陽工業地域の再編に関心がありました。この地域は先進的斜陽化とも言えます。失業率も、フランス平均も高いのに、さらにそれよりも高い。人によっては、親子3代で失業を長く経験している家系だみたいなことを言う人もするというふうな地域です。だからこそ市場経済だけで立て直すのは難しいからみたいにも考えられています。ビヤン・コマンで、みんなでわいわい言いながらやろうよとか。フランスはいろんな議論が好きですから、国会とか地方議会とかで議論するだけじゃなくて、公開討論会、地域の中でのいろんな議論が大事です。そこでまた意見という意味で、経済だけを切り離さない実践であり、ビヤン・コマンで何がいいとかか喧々諤々するわけです。

それから文脈は違いますけど、今、日本でも地方創生で、再び幸福度をどうするかっていうのが新しいプログラムで出つつあります。このリールっていう地域は、いろんなヨーロッパの新しい幸福度の研究とかでも一つの中心になってるようなところなんです。何が本当にいいのかをいろいろ議論する風土があるし、それからフランスのラヴィルっていう人は連帯経済研究を担ってきたんですけど、経済学は生産のことを中心に議論したけど、ケアをする経済っていうのが大きくなっていくから、その部分も含めなきゃ駄目だなと。生産もフォードイズム的な大量生産 - 大量消費ではないので、ますます質の規定というのが重要になるから、さっき言った需要と供給の結合構築みたいなものがあるしと。市場も国家も大事なんだけど、その二元論だけではなくて、みんなのものをどう使っていくのかということが議論されています。

社会連帯経済、フランスでは統計を取り始めると、NPOとか社会的な活動をしている企業とか、日本だと財団とか、何やら財団とかです。いろんな共済組合、協同組合みたいなものが多いっていうのは、これはフランスでこそ。それからその活動的な部分ということで、共済組合っていうのは、

例えば保険系が多いっていうのは日本でもそうだと思うし、日本も共済組合それぞれによって違うけど、共済組合の場合は余剰金があったら出資者に返すか、あるいは自分とこの元に入れてということで、それが民間企業になってしまった保険会社とかだと、利益のほうに行ってしまうという、そんなことがある。協同組合でいろいろな活動をしてると、アソシアシオンというのは、日本だと結社と訳すと政治結社のイメージが強過ぎるから、いろんなつながり、組織ではありますし、アソシエーションっていうのは、株、広く取ると株式会社もそうじゃないかという議論とかも出てくるわけですけど、NPOをはじめとしたような部門とか、それから企業のなんだけど、例えばいろんなITサービスやる所でも、もうけ至上主義じゃないような所のやつとかが、こういうところに出てきたりとかします。

日本と同様に、食べ物のもとかで、いろいろな話、地産地消とか。あるいはこれ、スーパーから期限近くになったやつを大学のほうに供給してもらってっていうような活動で、いいなと思っていたら、コロナになると専修大学もいろいろ始めて、実際そのキャンパスでも日を決めて、学生さん、先着何人、配るとか。それから余っているのを置いているボックスとか使ったりとかして、こういう活動を始めたりもしています。やっぱり教育と、広い意味での医療系っていうのが多くなってきましたというふうなところ。調査を始めた頃にはなかったですけど、いろいろ組織がますます増えてきて、リールっていうのは100万都市というか、福岡や仙台よりちょっとちっちゃいぐらいを考える、やっぱりそこを中心に、メゾンっていう、家という施設なんですけど、今そういういろんな連合体が入るような、こういう大きいのもできたりもしています。

コロナ禍で日本も増えたんですけど、その前からシェアオフィスみたいなのをやっているようなところあります。自主的運営組織ですが、理想としてはメンバー間に階層なくやるけども、そうすると、やっぱりなかなか意思決定が大変だっていうのも正直なところだっていうのはあると。一人一票での意思決定システムです。それから同じレストランにオーガニックカフェレストランとか、いろんなものが出てきて、お金は重要なんだけど、

換算できない豊かさとか、またそのつながりを生かして、なんか新しいことできないかみたいななのをつくっていきみたいなのだと。

他のだと、地域通貨とか補完通貨とかありますが、時間通貨っていったって、カナダのケベック州で始まった仕組みが導入されています。実は学問の世界でも、カナダのケベックとフランスっていうのは結構結びつきがあって、フランス語圏同士です。ケベックで使われるフランス語はもっと古いフランス語なんです。時間通貨っていうのは、それぞれ人によって能力は違うけど、時間で見てみたら、この人にとっての1時間、2時間とか、3時間とか違って、その何時間分で、互いの得手、不得手ですね。経済学だと、機会費用を考えて、より自分の得意なところにということですけど、社会的なつながりで、お互いの苦手なことをカバーするためとか、ケガしてできないということをカバーするために、時間通貨の枠組みで生活の質向上をやらうみたいな取り組みがありました。

それから都市計画なんかだと、フランスは典型的にそうですけど、官僚組織、強くてトップダウンっていうのをずっとやってきたけど、もっと下の意識、もっと聞く中でやらなきゃならないっていうのが、とりわけかつての繊維産業の中心地ですね、ベルギーに近いほうのところっていうのは、こういう日本にもよくある繊維のまちがだいぶなくなっていく中での開発っていうのをどうするかっていうと、何でもつぶして新しいのをつくらないと、つぶさざるを得ないものもあるけど、やっぱり地域で人に聞いて、これは残そうよとかっていうのを、もっと議論する中で見ようと、それから新しいのもいいけど、残しつつやって、やれるのもいろいろあるだろうと。その中で、かといって古いのばっかりやってるとなかなか厳しいから、繊維っていうのは着るだけじゃなくて、いろいろ産業用繊維の話もあって、そういうのを研究開発の新しいのをしてくるとかあります。

それから、ここの辺、いろいろ建築として使えるのがあるから、まさに建築デザインやれるような人たちがいろいろ入れるようなところをやってくるとか、それからいろんなIT系でも、まさにもうけ至上主義とかもあって、もっとそれとは違うソフトウェアを作ろうよみたいな、クリエイティブコンテンツです。ただ、やっぱりなかなか、地

域通貨もそうですけど、厳しくて、実は松山では、ある所で、この間も話、聞いていろいろやってると、せっかく来てくれたからっていうので、1000円、今はあれか、このデジタル通貨になる1000円分もらえたわけなんです。松山市を中心にいろいろ取り扱い店舗が増えてるって言って、いざ店で使おうと思うと、このシステム、パッドとかがあればできるんですけど、やっぱりなかなか最近使っていないで使えませんか、今、それを使える、分かる若い人、いませんかと言われるの多くて、PayPayぐらいだと、どの店も最低限の対応してんですけど、なかなか違うネットワーク、作ってる人自身は、今の大企業はもうけ主義もあるけど、一方でいろいろ店からデータ、集めてるのに、そのデータを店側が活用させてくれないじゃないかと。

つまり一方的にそういう主要企業が情報も握って、次なる戦略を考える。末端の店とか、全くそれを有効に使えなくて、そこはいろいろ問題の不平等があるんじゃないかというふうなのがあって、意識しているということです。フランスでもまだまだ大きくなるわけじゃないけど、こういうのもあるし、さっきから強調していることですけど、フランスの社会連帯経済は、こればっかり強調してるわけじゃなくて、市場でやれる部分はやるし。しかもフランスでは再分配が大きいのですの、再分配でやれる部分もあります。

6. コミュニティと社会

ちょっと時間がなく、短く最後のコミュニティと社会、いきますけど、最初に言ったように、コミュニティ、重視する人は、最後の結論も、やっぱりコミュニティだとか、それ、重視だと。学生の皆さんは、これからいろいろ論文とか提言とか読む機会あると思いますけど、結構その方向性で終わってしまってるものも多いですね。いや、コミュニティを大切に考える観点は大事なんだけど、それだけでいいのかと、むしろ社会の構成員全体での仕組みのほうを整えたほうがいい場合もあります。一方で、経済学者は基本的に、西部忠さんって進化経済学の私の同僚ですね、コミュニティが希薄と指摘しています。それから小野塚知二先生って、東京大学を定年になった西洋経済史の先生、いろいろアソシエーションとかあるけ

ど、残るのは株式会社ぐらいで、なかなか見果てぬ夢じゃないかと述べられています（文献 [1]）。

社会とコミュニティ、この組み合わせが大事だと表2をもとに考えます。これ、何を言うかっていうと、社会の制度もコミュニティも弱いとなると、これはまさにカオスとかジャングルの世界だということですね。一方、コミュニティは非常に強いんだけど、社会の制度が弱いと、実はラテンアメリカ諸国、そういうこと結構あるわけです。そうすると、集合的発言も非常に偏ってくるし、集団内での階層の関係も非常に強いと、私、もともとフランスよりも北米調査をやっていました。メキシコでは、しょっちゅういろんな事件がおきます。なんとかしようとした市長や警察庁長官が殺されることも多々あった。ギャングだとかあるけど、ギャングの人は、本人はそう悪いことという意識はないかもしれない。つまり社会の制度が非常に弱くてコミュニティが強いと、別にそのコミュニティの論理で、かつ階層関係、強いと、上の人の言うこと、やること、何が悪いんだと、その極端な表れが、いろんなこと言う市長を殺すとかいうのに現れます。

一方、経済学者が論じたら、社会ばっかりの制度でやっていくと、それぞれでやってくと、まさにさっきの共通善とか共通財っていうのが不十分になっていく。誰かがやるだろうと、やればいい。それから個々に分かれるばっかりで、いろんなものの取引コストとか、信用とかっていうのは極めてなくなっていくし、それから再分配自体のシステムも、大概弱くなっていくような道筋に行きがちだということからすると、この組み合わせっていうのを考えなきゃならないのじゃないか。それ、何でいくかっていうのも、おそらく変わってきます。

社会連帯経済みたいな話があって、皆さんと年齢が同じぐらいの長女がいるんですけど、教育のことを勉強しています。この間、ちょっとラジオを聴いていたら、フィンランドなんかは、義務教育は学費だけでなく、給食、それから副教材、修学旅行、学習旅行、いろいろなもの、それも全部国が負担しています。そうすると、いろんな学ぶ機会のための社会連帯企業の活躍の場っていうのは小さくなるわけ。何でも社会連帯企業の程度が高いほうがいい社会とか、そういうのではなく

て、やはりどの組み合わせで持ってきているかっていうのは、いろんな国によって違うということですね。地域によっても違うっていうことで、ローカルを通しては、きょう、ダイバースエコノミーズと連帯経済の話しましたが、国や世界を範囲にしていると、見えないとか扱わない、数字に出てこないから扱わないと、海面上に出てこないから扱わないっていうのは多いけど、ローカルだからこそ見えてくる部分を考えるっていうのは、学問上も重要だし、いろんな社会実践上も重要じゃないかと。そこを捉える上で、きょう話した多様な経済と社会連帯経済が多々ある。ただ、地域によってコンテキストに違いがあるということですね。育児、介護、それからリサイクルの使い方もありますし、さっき言った教育にしても、これは国、地域でコンテキスト、文脈が違うから、それをよく考えなきゃならないし、何がベストかも変わってくる。

例えば日本で繊維地域、厳しいというので、群馬県の桐生市に行く機会もあったのです（文献 [5]）。桐生では群馬大学の工学部、こういう研究が強くて、電動のゆっくり、今、東京なんかでもいくつか導入したいとかっていう話が出てきてんですけど、スローモビリティという20キロ以上出ないバスですね。電気で動くんです。それ、導入して、群馬大学の工学部はまさに研究拠点で、桐生は古い、江戸時代からの町だから、かつては群馬県で一番大きな町だったんです。中心市街地は密度が高いんです。一般的な群馬県っていうのは超車社会。こんな走らせたらとんでもないって言われるところがたくさんあるんですけど、桐生の市街地はどうせスピード、出ないからっていうので、やっぱり、これもまたどこで使うかっていうのは地域ごとのコンテキストがある。

中心になった人は信用金庫のOBとか、信用金庫も、金融で言えばフランスだと連帯金融に入れられるような、どっちかっていうと自分たちでもととつくって、自分たちで顔の見える相手に貸してとか、そういうふうな所ですけど、そのネットワークや高校のネットワークで、この事業をやってみようということです。担い手、やっぱ高齢者の担い手をもって、もうちょっと若い世代にもってあるけど、いろいろな試みで、ある種の日本でのそういう試みの一つかっていうことで、あ

らためてここにいる学生さんもそうですけど、地域に関心持つ人には、地域のことは極めて重要。特に経済学部にいると、ローカルの重要性分かっていない人、多いけど、ローカルの重要性、分かってほしい。一方で、ローカルの重要性、考える人は、最後の結論でコミュニティ重視だけで終わるんだけど、社会全体の制度がいいのか、コミュニティがいいのか。そして経済を立て直す上でも、市場とか政府の再分配だけではない部分もあるんだということを意識して、考えてもらえればなというふうに思っていて、きょうは私の問題意識みたいな話ばかりしました。以上で、私の話を終えたいと思います。どうもありがとうございました。

文献

- [1] 専修大学社会科学研究所 (2023) 「特集 アソシエーションの将来——希望と絶望の狭間で」『専修大学社会科学研究所月報』第721号.
- [2] 立見淳哉・長尾謙吉・三浦純一編 (2021) 『社会連帯経済と都市—フランス・リールの挑戦』ナカニシヤ出版.
- [3] ジャン・ティロール著、村井章子訳 (2018) 『良き社会のための経済学』日本経済新聞出版.
- [4] 富沢賢治 (2023) 「社会的連帯経済とはにか—協同組合運動の新理念」『生協総研レポート』第98巻.
- [5] 長尾謙吉 (2022) 「群馬県の近現代にみる空間統合と空間集積—『近代化遺産を通して学ぶ社会変化』の問題意識—」『専修大学社会科学研究所月報』第710・711号.
- [6] 長尾謙吉 (2023) 「コミュニティのつながりか、社会全体の制度か?—Think local かつ Think bigな人文地理学に向けた問題提起—」『人文地理学会研究発表要旨』.
- [7] 長尾謙吉・立見淳哉 (2022) 「持続可能な経済社会とローカリティ研究」『21世紀における持続可能な経済社会の創造に向けて』(日本経済学会連合) 第1巻第3号.
- [8] 中澤高志 (2020) 「『多様な経済』への希望」『学術の動向』第25巻第8号.
- [9] 古沢広祐 (2021) 「持続可能な日本と地域社会ビジョン」『季刊社会運動』第441号.
- [10] 水岡不二雄編 (2002) 『経済・社会の地理学—グローバルに、ローカルに、考え行動しよう—』有斐閣.
- [11] J. K. Gibson-Graham, Jenny Cameron and Stephen Healy (2013), *Take Back the Economy: An Ethical Guide for Transforming Our Communities*, University of Minnesota Press.

多様な経済：市場と経済分析を自明視せず

- ・ 市場経済：「氷山の一角」
 - － 賃労働
 - － 営利企業による市場向け生産
- ・ 「強い理論」や「大きな物語」
 - － 地方の現実と絶望感？
- ・ 水面下に隠れる「多様な」経済
 - － 「弱い理論」の実践
 - － 多様な経済的实践



図1 「多様な経済」論が明示する氷山
出典：Gibson-Graham, Cameron and Healy (2013, p.11) を一部修正し作成。

出典：長尾・立見(2022, p.12)

1

表1 ファッションの「多様な経済」におけるアクターとアクション

労働	企業	取引	資産	金融
賃金	資本主義	市場	私有	主流の市場
・ コスタリカにおける衣服産業の低賃金労働者 ・ 香港における衣服商のサラリー給の販売マネージャー	・ 東南アジアに展開する大規模な衣服製造業者 ・ 10人のスタッフを雇用するロンドンの小規模な衣服商	・ アメリカ合衆国のショッピングセンターなどに展開する小売店舗 ・ アメリカ合衆国に基盤を置く既製服ラベルの国際的な通信販売・オンライン販売	・ パリのファッション・メゾンの商標ラベルとデザイン	・ カナダの衣服チェーンがアメリカ合衆国に進出するための銀行ローン
代替的支払	代替的資本主義	代替的市場	代替的私有	代替的市場
・ ニュージーランドにおける自営ファッションデザイナー ・ ホンジュラスにおける家庭を基盤にした出来高給の労働者	・ 除草剤や害虫駆除薬を用いないオーガニック綿会社 ・ 職人シェアホルダーとなっている非営利企業	・ チャリティーにより運営される中古販売店 ・ 個人によるオンライン販売 ・ タンザニアにおける中古衣料市場	・ 家庭における兄弟姉妹での衣服のシェア	・ バングラデシュの女性がミシンを購入するためのマイクロファイナンスによるローン
無給	非資本主義	非市場	オープン・アクセス	非市場
・ 自身や家族のために衣服を縫う世帯主 ・ 衣装ダンス整理を互いに手伝い合う友人	・ アルゼンチンにおける機械工の協同組合	・ 友人の出産祝いにベビー服を贈る両親 ・ 地震災害地域で活動する国際的なチャリティーに冬服を寄贈する家族	・ 様々なファッションがどのように見えるかを記述するオンラインブログ	・ 小規模なファッション・ビジネスを始めるための家族からのローン

出典：Gibson-Graham, Cameron and Healy (2013, p.14) を一部修正し作成。

出典：長尾・立見(2022, p.13)

表2 社会とコミュニティの組み合わせによる経済・社会の編成の可能性

		コミュニティ	
		低い	高い
社会	低い	<u>自律もなく責任もない</u> カオス ジャングルの法則 あらゆる種類の高い取引コスト 公共財の破壊、収奪、私的利用	<u>責任のない自律</u> 集合的発言 エージェンシー問題 コミュニティの「原初的」形態の普及 集団間の階層的関係 レントシーキング集団 低い信頼と信任の欠如 レントと階層に起因する受容しがたい再分配効果 永続的な対立
	高い	<u>自律のない責任</u> 個々のエージェンシー 不十分な集合的また個々の発言 不十分な公共財 低い信任と高い取引コスト 長期的な受容しがたい再分配のトレードオフ コストのかかる紛争の解決、対立的な社会	<u>責任のある自律</u> 発言とエージェンシーの良好なバランス 信任の容易化 持続的な再分配のトレードオフ 紛争解決の容易化 強い社会によるコミュニティの近代化 強い結束による匿名性に伴うコストの削減

出典：Storper（2005：48）、Rodríguez-Pose and Storper（2006：11）、立見・長尾（2013：97）を一部改編。